

# C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese di Kyoto

BEL CICLISMO!

## \* 素晴らしき自転車レース⑩ \*

谷口 和久

(前号—2011年8月号—に引き続き、ヴィンテージ・ロード・ギャラリー「BI・CI・CLASSICA」オーナー、ルイーダ・ヴェラーティさんインタビュー後編)

谷口(以下 T): 憧れの選手はいましたか?

ヴェラーティ(以下 V): エディ・メルクス。ビョーキでしたよ(笑)

T: イタリア人じゃないんですけど(笑)。

V: メルクスはイタリアにたくさんファンを持っていたんですよ、イタリア人じゃないけど。もう関係ないレベル。イタリアのチームでずっと走っていたし、イタリア語もしゃべったし。本当に素晴らしい選手だったね。

T: 実際に彼の走りを見られましたか?

V: もちろん見たことあるし、しゃべったこともありますよ。初めて見たときは、もう心臓が飛び出そうだった(笑)。初めて見たのはジロのタイムトライアルで、ちょうどうちの近くでレースがあつて見に行っただけです。忘れられないですねえ。2年前にイタリアに帰った時に、昔メルクスのアシストをしていたという人に出て、メルクスのことを聞いたんだけど、ひと言「ありえない “incredibile”」と(笑)。彼は自分で「このレースで勝つ」と思ったら、必ず勝っていた。1500いくつものレースを走って、500回以上勝ったんだから。3回に1回勝った計算だよ、ほんとありえない(笑)。そもそも普通のレベルのレースじゃないんだからね。

T: そうですね、ツールとかジロとか!

V: ミラノ・サンレモとか、パリ・ルーベとか。今だっ

たら1回勝てば十分なものばかり。ただ、当時は今ほど周りも含めて全員が一生懸命やっていたわけじゃないし。もちろん、昔もみんなまじめにやっていたわけだけど、今はみんなちょっとやりすぎですね。誰もがダイエットしているし、薬も飲んでるし、良いものも悪いものも含めてね。常に(自己)コントロールしているよね。今は全体にレベルが高すぎて、均されてしまって面白くないよね。見る方にとっては、ね。



【ヴィンテージ・バイクの並ぶ「BI・CI・CLASSICA」】

T: サスペンスがないんですよ。

V: そう、なんか人間味がなくなっているんですよ。昔は良い意味での「適当さ」があって、それが良かったんですよね。例えば、昔のジロではボトルの中にワイン入れて走っている選手がいたんですよ。なんでかと言うと、食後の消化のためにいつもポケットにワイン入れているんだって。ありえないでしょ(笑)。

T: 人間らしさということですよ、選手もそうですが、自転車本体も人間味がなくなっていますよね。

V: 全てがそうやね。かつては人間がインスピレーションとか経験とかアイデアとか、そういったもので自転車を作っていましたよね。それが今はコンピューター。細かいところまでチェックして、管理して。つまり「人間」が消えてるんよ！モノは完璧になってるんだけど、人間らしさは減ってるよね。完璧さは機械的なもの。だから面白くないよね。

T: 人間自体が、そもそも完璧なものではないわけですし。

V: そうです。(完璧なところを)目指す気持ちはわかる。けど、少し手前くらいの方が、人間にとっては幸せじゃないかな。

T: 昔の自転車を集めておられるのも、その頃の自転車に人間らしさを感じておられるから？

V: そうですね。もちろん今の自転車と比べると、(機能的に)ようわからんところがいっぱいある(笑)。でも雰囲気はやっぱり違うよね。

T: 私自身は、昔の自転車はもちろんリアルタイムでは見ていないわけですが、ノスタルジーからではなく、純粋に美しいと感じられる。それは何によるものなんでしょうね？

V: 昔の自転車というのは、人間が自転車に乗って、それで(総体で)美しく見える。要は(生身の人間と)違和感がないんです。今の自転車は、ごついヘルメットかぶってサングラスして派手なウェア来てないと違和感がある。だんだん「機械」から「マシーン」になってるよね。

T: 人間もサイボーグみたいに。。。

V: そう。一方で人間そのものはだんだん弱くなっている！(本業の)建築もそう。インパクトばかり求めている。今は、インパクトがないとダメな時代だから。でも残念だけど、インパクトばかり求めたものっていうのは、流行りもので終わっちゃうの。なんでもそう、インパクトあるものは「ドキッ」とす

るけど、すぐに過ぎ去ってしまう。(心に)残りにくいんですよ。古いものは何かしら美しさを持っているよね。新品では持ちえない、「時間の流れ」が作る美しさというものを。

T: イタリアは日本と比べて、古いものを大切にしますよね。特に町並みとか建築とか。

V: その点は国が管理しないと、個人では難しいよね。イタリアでもきちんと残っているのは、個人の意識もあるけど、やはり法律によるところが大きいですね。イタリアはすごい厳しいですよ。あと、最近どうなっているかわからないけど、イタリアでは「生まれた町」=「死ぬ町」。日本の場合はほとんどそれがないよね。京都で生まれて、学校は東京、仕事は名古屋、ぐちゃぐちゃでしょ(笑)。だから、自分が今住んでいる街を大事にしようという気持ちがなかなか起こらない。

T: う〜ん、耳が痛いですね(笑)。

V: 日本は何事も経済中心にしすぎ。文化は金にならない、という認識が強すぎるよね。けど実際にはそうではないはず。短いスパンで見たら確かに難しいけど、でも日本でも長いスパンで文化を大切にしている街は強いんですよね、京都とか。大阪は全然ダメです。

T: 日ごろ、日本で自転車で乗られていて、イタリアと日本との違いは、どういったところに感じられますか？

V: 日本では当たり前のように逆走していますよね(笑)。でも、結果的に言えば、日本の方がまだ安全。イタリアの方が重大事故が多いんです。車がスピード出してるからね。イタリアの方が走りやすいことは確かだけど、トラブルが起こった時には、イタリアの方が重たいトラブルになるね。日本はごちゃごちゃしてるけど、結果的には安全かもしれない。車さえ気を付ければ。車は(動きが)読みやすいからね、今から左とか、今からブレーキ踏むとか。歩いている人や自転車よりよほど読みやすいよ。そういう意味では、舗道(を自転車で走るの)は危ないよね。あと、日本では立場的に車が強くて自転車が弱いけど、イタリアはそうじゃない。法的に対等。だから(車のドライバーが)自転車にぶつかった時に大変なことになるという認識がイタリアではないんだよね。私がイタリアで走っていた頃も、何度も車とぶつかったけど、逆に車からどなられたことも何度もあったしね。

T:こっちが血を流しているというのに！  
V:そうそう(笑)。でも、やっぱり景色は(イタリアと日本では)違うよね～。それがさみしいね(笑)。  
T:ミラノに住んでいた頃は、どちらに走りに行かれていたんですか？  
V:一番よく行ったのはコモ湖。練習でよく行きましたね。イタリアは町から少し離れたら、すごくきれいですよ。コモ湖やマッジョーレ湖、そのあたりが一番よく行きましたよ。  
T:日本でレースに出られたことは？  
V:出ましたよ。  
T:いかがでした？  
V:面白くなかった…。1年間だけレースに出たけど、仕事との両立の問題もあったし。レースでは、周りの人は自転車レースのことや文化をよくわかってない感じだったね。まずもってレースの流れをわかっていない。でも、しかたないよ、それは。だって、例えば逆にイタリア人が相撲やっても、イタリア人がちゃんと理解して出来るわけないでしょう(笑)。時間がかかりますよ、そこは。歴史が全然違うし。本で勉強できることだけではないから。でも、最近はヨーロッパに行って活躍している日本人選手も増えてきているから、これから変わっていくでしょうね。



【オリジナル・フレームを手にするヴェラーティさん】

それと、今はレースには出たくないですねえ。きついことがわかっているから。レースに出て、走り始めたら、どうしても追い込んでしまうし。自分にとってレースとはそういうもの。楽しめるものではないね。強かったら楽しいんだけど、ストレスたまるよね、逆に。今はタバコも吸うし、お酒も飲むし、仕事は遅くまでやってるし(笑)。毎日、通勤で自

転車には乗っているけど、レースのことは考えてない。私にとっては、レースは勝つために出るもの。だから楽しいものというイメージはあまりないね。サイクリングは楽しいけどね。もうスピードは求めない(笑)。

T:いろんな楽しみ方があるのも、自転車の良さですよ。

V:そうですね。車体のことに話を戻すと、今のものはスピードを求めたかたち。だから固いし、軽量化のことばかり考えているし。スピードが出ないとカッコ悪い、そんな形のものばかりやalne。うーん、なんというか、やさしくないよね。

T:オリジナルフレームはご自身でデザインされたのですか？

V:そうです。そして、製作は日本のビルダーです。デザイナーとしては、自転車のデザインは結構大変でしたよ。フレーム単体できれいでダメで、組み立てて、そして人が乗って美しくなければ。

T:ヴェラーティさんのこだわりのポイントは？

V:まずは、かつての70年代、80年代の自転車が持つ美しさを現代に引き出したかった。形はクラシックだけど、今の時代のことも考えながらデザインしました。

T:こちらはフルオーダーですか？

V:そう、フルオーダー。私がイタリアで乗っていた頃も、自転車はビルダーのところに行って、いろいろ話しながら買うものでしたし。でもビッグブランドは並んでいましたけどね。ビアンキとかポテッキアとか。要は、ママチャリからロードバイクまで作っているスーパービッグブランドしか店頭には並んでいなかったんですよ。でも、レース出るような人はそういうものは買わなかった。レースに出るような人は、ちゃんとビルダーのところに行って注文する。(レーサーにとっての)自転車は自分の体に合わせるもので、既製品ではダメ。私としては小規模ながらも、そんな伝統を残していきたいという思いがあります。

<取材協力>

ヴェンテージ・ロード・ギャラリー「BI・CI・CLASSICA」

大阪市中央区瓦屋町 1-10-7

(当館スタッフ)

## RiITALIA -イタリア再発見-

### 第3回『ラ・フェスタ』

国司 航佑

フェスタという言葉は、我が国のイタリア語学習者の間では、誰もがこれを耳にしたことがあると言える程に、流布している。しかし、この単語に対して一人一人が抱く感情は、恐らく千差万別のものだろう。なにせフェスタは、日本には全くない習慣でありながら、一度イタリアの地に足を着ければ、至る所で遭遇することになるイタリア重要無形文化財の一つだからである。これを体験したことがない者は、漠然と素敵な時空間を想像するのだろうか。一方で、これを体験したことがある者は、好きになるか嫌いになるか、はっきりと二手に分かれるだろうと思う。あるいは、筆者のように、愛憎相半ばするといった感情を抱く者もいるかもしれない。フェスタは、体験した者の心身に強烈な印象を刻むのである。



【フェスタあるところに笑顔あり、らしい】

筆者が初めてフェスタを体験したのは、1998年の秋、トレントに留学していた頃のことである。当時、トレントと近隣の町（ボルツァーノとヴェローナ）に留学していた外国人高校生の数は確か15人程度だったと記憶しているが、この15人とそれぞれのホスト・ファミリーそして関係スタッフ等が集まり、総勢100人を超える国籍様々な老若男女が一同に会して、その日のフェスタは開催された

のであった。今でも記憶に残っているのは、他の留学生と共に舞台上に立たされて、大聴衆を前に自己紹介をさせられたことである。イタリアに着いてまだ1ヶ月も経たない時のことだったから、留学生の中でイタリア語を流暢に話せる人はいなかった。自然と、スピーチは英語で行われ始めた。

ところが、筆者はその流れに乗ることはなかった。当時の筆者が、今に比べて目立ちたがり屋だったからかもしれない。ホスト・ファミリーが厳格な家族であり、家庭で英語を使用することが禁じられていたという事情も関係しているだろう。また、周りの留学生の話す英語があまりに見事だったという事実も、筆者に何らかの心的影響を与えたに違いない。しかし、理由はともあれ、筆者はイタリア語で堂々と自己紹介を行ったのである。そして、拍手喝采を浴びたのであった。内容は、“Buona sera! Mi chiamo Kosuke Kunishi. Vengo dal Giappone. Mia mamma si chiama…”（ホスト・ファミリーの構成員を紹介）Mi piace il calcio!! Grazie.”といった、他愛もないものであった。しかし、イタリア語を使うという行為自体が、特に評価されたようである。その後、数人から握手を求められ、ヒーローになった気分で考えたのは、フェスタというのは悪いものではない、ということであった。ちなみに、これは後で分かったことなのだが、この時の受けの良さの一部は、実は筆者が図らずもおかしたイタリア語のミスに起因していたのであった。“Mio papà si chiama…”（私のお父さんの名前は…）と言うべきところを、“Mio papa si chiama…”（私の教皇の名前は…）と言ってしまった。今思えば、可愛い間違いである。

それ以降は、嫌なフェスタにも、随分お目にかかった。いやむしろ、参加したフェスタのほとんどが嫌なフェスタだったと言った方が正しいかもしれない。イタリア（恐らく西洋全般にそうだろうが）のフェスタには、誰を招待しても構わないという暗黙のルールがある。必然的に、パーティー会場では、見ず知らずの他人に頻繁に遭遇することになる。そこには、誰を呼んでもよいという自由な雰囲気や、知らない人に出会えるという刺激的な環境があり、筆者がそれを満喫できる時もあるにはある。が、ほとんどの場合、そういう状況は却って苦しく感じられてしまうのである。初めて会った人や大して親しくない知人と酒飲み歌い踊りはしゃぐとい

う行為が、筆者には不向きなものなのかもしれない。自分が詰まらなく感じているときには、他人の笑顔を見ると却って苦痛が増すものであって、フェスタにはまさにこの魔のスパイラルが常備されているといえよう。筆者も度々このスパイラルに陥ったもので、特に酷いときには、「こうしている間にも世界中には苦しんでいる人がいる」等と脈略もなく突如悲観的な妄想を開始して、一人殻に籠ってしまうことがあり、それも一度や二度ではなかった。詰まらないフェスタほど詰まらない物はない。一連のフェスタ経験を通じて、筆者はこのように、確信した。



【TAPPARELLA のプロモーション・ビデオから】

ところで、長らく私は、イタリア人がフェスタを楽しむ人種であると考えてきた。ところが最近、あるポップ・ソングを聴いて、この考えを修正することになった。Elio e le storie tese という中堅バンドの、“TAPPARELLA”（日よけ、ブラインドの意）という歌がそれである。主題は、la festa delle medie（中学生のフェスタ）である。筆者は、この歌を聴くまで「中学生のフェスタ」というものの存在すら知らなかったのだが、友人・知人に訊くと、どうやらこれはイタリア人なら誰でも経験する類のものらしい。部屋を暗くして雰囲気を出すために下ろされるブラインド。大量に用意されたプラスチックのコップと、その上に書かれた各人の名前。ワイン・ボトルを回して、口が指した方向にいた人と底が指した方向にいた人とがキスをするという、通称“il gioco della bottiglia”（ボトル・ゲーム）。これらが「中学生のフェスタ」に見られる典型的な場面ということだが、Elio e le storie tese はまさにこういった場面を取り上げ、そこに入り込むことができない哀れな少年の苦痛の叫びを見事に表現している

のである。Elio e le storie tese は現在イタリアでも（知識人に？）人気のあるバンドの一つであり、“TAPPARELLA”はそんな彼らの代表作であるから、この歌の歌詞の内容が多くのイタリア人に共感されていると考えても差し支えないだろう。以上から導き出される、イタリア人のうちにもフェスタを楽しめない人間がいるという結論は、筆者を安心させるものである。

さて、数あるフェスタの中でも頂点に君臨するフェスタといえば、なんとといっても結婚式であろう。先日、トレント時代のホスト・ブラザーの結婚式があり、はるばるナポリからトレントに出向いて参加してきた。新郎であるホスト・ブラザーが、超の付く国際派（高校時代ドイツに一年間留学し、その後ウィーンで四年間の大学生活を送る。卒業後、ロンドンで大手銀行に二年間勤務、現在はフランクフルトに在住）である上、新婦がオランダ人であるため、典型的なイタリア型結婚式だったとはいえないかもしれない。しかし、ヨーロッパ圏内での異なった国籍同士の結婚は、今や珍しいものではない。国際的かつイタリア的な結婚式は、これからイタリア文化の一側面となっていくに違いない。

式は、町の小さな教会で行われた。教会の前に、黒いリムジンが颯爽とやってきて、白いドレスに身を包まれた花嫁がすらりと降りてくる。そこに、水色のヴェスパに乗った新郎が登場し、新婦を乗せて辺りを一周する。なんとなく、どこかの映画で見たことがあるような光景ではあったが、実際にそれを目の当たりにしてみると、あまりの美しさに言葉を失った。教会の中に入ると、あまり厳肅でない段取りで式は進められた。新婦側の全員と新郎側の一部がイタリア語を話さないため、神父の言葉が英語に同時通訳される（オランダ人は老若男女問わず、全員英語を話すようだ）。筆者は、最初は物珍しさに興味津々で式の進行を追ったが、そのうち退屈してきた。教会内を見回すと、向こうの方に唯一カジュアルな格好をしている年も若くない女性がいる。誰だろうと気になって一挙手一動足を観察していると、最後に虫取り網に似た器具を持って、小銭集めを開始したではないか。なんだ物乞いか、しかしこんな神聖な場所に土足で入りやがって、とその時筆者は憤慨したのだが、後で知人に訊いてみたところ彼女は“sagrestana”（聖具管理人）であった。筆者は、“sagrestano”と

いう単語にまだ髭も生えていないような青少年のイメージを重ね合わせていたので、合点が行かない。不思議そうな顔をしていると、知人に『いいなずけ』(文豪・マンゾーニの代表作)のアニエーゼだよと言われ、納得したものである(まったく、筆者の「イメージ」程当てにならないものはない)。



【ヴェスパに乗る新郎・新婦】

その後、湖畔の広い庭園に移動し、軽食をとりながら余興タイム。夕食時になるとその隣にあったお城(!!)の中に入る。とここまでは、何か夢

(元会館スタッフ)

## … 会館 だ よ り …

### イタリア語 無料体験レッスン

10月より開講の秋期イタリア語講座に向けて、体験レッスンを開催します。入門者向け。事前予約制。

● 京都本校: 日本イタリア京都会館

10/ 8 (土) 11:00~12:30  
10/ 8 (土) 13:00~14:30  
10/11 (火) 11:00~12:30

● 四条烏丸: ウイングス京都

10/11 (火) 19:00~20:30

● 梅田: 大阪駅前第4ビル

10/ 5 (水) 13:00~14:30  
10/ 9 (日) 13:00~14:30  
10/10 (月) 19:00~20:30

### スペイン語 無料体験レッスン

入門者向け。事前予約制。  
日時: 10/8 (土) 15:00~16:30  
会場: 日本イタリア京都会館 本校  
講師: 当館スペイン語講師

### ポルトガル語無料体験レッスン

入門者向け。事前予約制。  
日時: 10/3 (月) 19:00~20:30  
会場: 日本イタリア京都会館 本校  
講師: 当館ポルトガル語講師

### イタリア語辞書の歴史

~『クルスカ学会辞典』(1612年)を中心に~  
日時: 10/1 (土) 18:00~19:30  
会場: 日本イタリア京都会館 本校  
講師: 長神 悟(東京大学文学部 南欧語南欧文学科教授)  
受講料: 維持会員 500円  
受講生・一般 1,500円

でも見ているようなシーンの連続であった。しかし、テーブル表の中に自分の名前を探しそして自分の席に着いたとき、胸騒ぎがした。知り合いが誰もいない。まさかと思ったが、そうである、イタリア語を話す人間が一人もいないのである。が、それだけではない。なんと、同席者全員、ドイツ語圏の人間なのである。筆者のドイツ語は初級文法を齧った程度のものでしかないから、必然的に彼らとの会話は英語で行われることになる。だが、彼ら同士は、もちろんドイツ語で会話する。つまり、筆者と会話するときだけ彼らは英語を使うのであり、これでは、話の輪に入り難い。加えて、彼らの話す英語は筆者のそれに比べて圧倒的に流暢であったから、余計に英語で話を進めることが躊躇われる。そして、何よりも大きな苦痛を与えたのは、彼らが皆カップルであり自分一人が独り者であるという、この上なく歪んだ座席の組み合わせであった。それから3時間、高級料理と共に、「コンプレックス」が筆者の腹に溜まっていった。

編集・発行 / (財) 日本イタリア京都会館  
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4  
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357  
E-mail: centro@italiakaikan.jp  
URL: http://italiakaikan.jp/